

「神の命令」

ヨハネの手紙第一 3:11~24

はじめに

今日は「神の命令」というタイトルでヨハネの手紙を分かち合いますが、結論から言うとその命令とは「愛する」こと、また「互いに愛し合う」ことだとヨハネは述べています。「愛」という言葉は新約聖書（新改訳第3版）で292回使われていますが、そのうちの84回もがヨハネが記した書（ヨハネの福音書、ヨハネの手紙、ヨハネの黙示録）で使われています。ですから彼は今日「愛の使徒ヨハネ」と呼ばれています。そのような訳で今日の箇所も教会、イエシュアを信じる者たちに対して「愛する」こと、「愛し合う」ことの重要性と必要性をひたすら説く筆者ヨハネの姿から、「愛」とは何かということについて考えてみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ I の手紙

3:11 互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。

「あなたがたが初めから聞いている教え」、初めの教え、それはもちろん神がモーセを通してイスラエルの民に与えられた十戒を中心とする律法のことです。そこには「互いに愛し合う」ことについてこのように記されています。

【新改訳改訂第3版】

レビ記

19:18 復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。

そしてイエシュアはこの戒めの重要性をさらに強調するかのように、このように述べられました。

【新改訳改訂第3版】

マタイの福音書

22:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

22:38 これがたいせつな第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。

22:40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

このように、「愛する」こと、「あなたの隣人をあなた自身のように愛する」ことは、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」という第一の戒めとほぼ同等の重要性を持つ

た、最も大切な戒めの一つであることが解ります。筆者であるヨハネが「愛する」ことについて述べることにこだわる理由がここにあると考えられます。このように、「愛する」ことは律法の第一の戒めと同等の戒めであり、イエシュアが述べたように「律法全体と預言者とが」この戒めにかかっている、集約されているのであり、もし神の戒め、教えを一言で表すとすればそれは「愛する」ことであると言えます。そこで重要になってくるのはこの「愛する」という言葉の意味をどう捉え、解釈し、私たちの生き方へと結びつけていくかということです。ですから「愛する」ことの意味が解らなければ、私たちは神を理解することも、その教え、戒めを理解することもできないということです。また「愛する」ことについての誤った理解は、当然のことながら神に対する誤った理解、歪んだ信仰を抱かせてしまいます。「愛する」ことに対する正しい理解、これこそが神に聞き従う者にとって、イエシュアを信じる者にとって必要不可欠な、最も大切な知識であるとヨハネは述べているのだと考えられます。

1. カインとアベル

3:12 カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行いは悪く、兄弟の行いは正しかったからです。

ヨハネは「愛する」ことを、ここでは逆説的に『カインのようで』(ではない)者と述べています。カインとは創世記に登場する人物で、最初の人アダムの息子であり、また地上で最初の殺人を犯した男です。ヨハネは彼について「悪い者から出た者」で、行いの悪い者であると説明しています。一体彼の何が悪かったのでしょうか。そもそも「悪い」とは一体どういう意味でしょうか。実際のカインについての記述から考えてみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。

4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。

4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、

4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。

4:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

4:6 そこで、【主】は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。

4:7 あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋慕している。だが、あなたは、それを治めるべきである。」

4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

このように、カインは弟のアベルを殺しました。それは単に弟を、人を殺したというだけでなく、「主はアベルとそのささげ物とに目を留められた。」とあるように、主がお選びになり、受け入れられた者を殺したということであり、これは神の主権による選びに対する反抗、反逆です。何故彼はこのような者になってしまったのでしょうか。ヨハネはこのカインについて「悪い者から出た者」と言っています。しかし彼は弟アベルと同じアダムとエバの息子です。この兄弟の生まれと育ちについては何の違いもありません。しかしカインとアベルは異なる生き方をしています。すなわち「アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。」ということです。「羊を飼う者」羊飼いと、言わずと知れた神のご性質と働き象徴です。

【新改訳改訂第3版】

詩篇 23:1 【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。

またイエシュアもご自分を指して「わたしは良い牧者です。(ヨハネ 10:11、14)」と言われ、弟子に対しては「わたしの羊を牧しなさい。(ヨハネ 21:16)」と言われているように、羊飼いと神の働きの総称とも言えるものです。このように、カインの弟アベルは、単に牧畜を職業としたと捉えるのではなく、神に従い、神とともに神の働きをする者を表していると考えられます。そして一方カインの「土を耕す者」とは、カインの父アダムが罪を犯し、エデンの園を追い出されたことで与えられた生き方です。

【新改訳改訂第3版】

創世記 3:23 そこで神である【主】は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。

このように「土を耕す者」とは「エデンの園から追い出された」者、罪人、呪われた者を指し示すものであると言えます。ちなみにヘブル語で土のことをアダーマー(אָדָמָה)と言い、この土のちりから造られた存在、すなわち人のことをアダーム(אָדָם)と言います。また「耕す」と訳されているヘブル語はアーヴァド(אָרַב)と言い、「仕える」という意味もある動詞です。ですからヘブル語の視点で見ると「土を耕す者」とは「人に仕える者」、すなわち神の為にではなく、人の為に生きる者という意味があるとも考えられます。このような神のことを思わず、人のことを思う者に対して、イエシュアはこのように言われました。

【新改訳改訂第3版】

マタイ 16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

マルコ 8:33 しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

神のことを思わないで、人のことを思う、このような考え方、生き方をイエシュアは「下がれ。サタン」と言われます。神中心の生き方ではなく、人中心の生き方、これが「土を耕す者」カインの生き方が「悪い」とされる理由であると考えられます。ですから「カインのようであってははいけません。」とは、人のことを思わないで、神のことを思いなさいということであり、人中心の考え方、生き方ではなく、神を中

心とした考え方、生き方を求めなさいということであると考えられます。人の歴史が始まってから今日に至るまで、人が造り上げた世界は常に人の利益、人の安全を目的とした考え方、生き方に基づいて動いています。特に人は、自分という人の利益、安全を第一に考えて生きています。これを考えない人、つまり神のことしか考えない人はこの世に一人しかいません。その一人とはもちろんイエシュアのことです。

【新改訳改訂第3版】

ピリピ人への手紙

2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

2:7 **ご自分を無にして**、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

2:8 自分を卑しくし、**死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。**

イエシュアはただひたすらに神、御父のことを思い、そのご計画のために「ご自分を無にして…死にまで従われ」た御方です。犠牲的な生き方をする人は他にもいるでしょう。しかし「神のあり方を捨て…自分を無にして」父なる神に従われた御方はイエシュアただ御一人です。ですから「カインのようであってはいけません。」とは、究極的には「イエシュアのようになれ。イエシュアであれ。」ということであると言えます。カインに殺されたその弟アベルはまさに「十字架の死にまでも従われ」たイエシュアの型だと言えます。神である主はアベルとそのささげ物の中にイエシュアを見たのです。だからこそ神はアベルとそのささげ物とに目を留められたのだと考えられます。このように「カインのようであってはいけません。」とは、アベルとそのささげ物「最上の初子」の中に表されたイエシュアを指し示すものであったと考えられます。

3:13 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。

アベルが兄のカインに殺されたように、ユダヤ人としてお生まれになったイエシュアもまた、同族の、つまり兄弟とも言えるユダヤ人たちの策略によって殺されるのです。たしかにイエシュアを十字架にかけたのはローマ人です。しかしユダヤ人たちのイエシュアに対する激しい妬みと憎悪が、ローマ人にそれをさせたのです。ですからイエシュアがそうであったように、イエシュアを信じるあなたがたも同じように憎まれるようになることを覚えなさいと筆者であるヨハネは述べているのだと考えられます。

2. 兄弟愛

3:14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。

3:15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。

「兄弟を愛する」、兄弟愛は「死からいのちに移った」者のしるし、証しであるというのが筆者ヨハネの主張です。そして兄弟愛のない者は「人殺し」もはや死んだ者、永遠に滅びるべき者とまで言い切っています。なぜヨハネはここまで「兄弟愛」にこだわるのでしょうか。その理由の一つとして考えられるのがヨハネの福音書 13 章に記されたイエシュアの御言葉にあります。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたと一しょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」

イエシュアは十字架にかかれる前夜、弟子たちと最後の晩餐である過ぎ越しの食事を囲みながら、ご自分が去って行かれること、そして後に弟子たちもついて来るという神のご計画について述べられている中で「新しい戒め」として兄弟愛、「互いに愛し合う」ことが命じられています。ですからヨハネが述べている「兄弟愛」という言葉には、イエシュアの「しかし後にはついて来ます。」と言われた神のご計画が結びついていると考えられます。すなわちそれはこの後に記された 14:1~3 でイエシュアが語られた以下の御言葉です。

ヨハネの福音書

14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

このように「互いに愛し合いなさい」という御言葉が、イエシュアが去って行かれること、すなわち十字架の死と復活、昇天と、そして後に迎えに来られること、すなわち再臨という重要な神のご計画の中に、まるで挟み込まれるようにして、そしてただ一つの戒めとして記されているのです。ですからヨハネが述べている兄弟愛「互いに愛し合う」ことが持つ意味は、一般的に捉えられているものとは次元が違います。イエシュアは決して赦し合って受け入れ合って仲良く平和に暮らしなさいという意味でこの御言葉を語られたのではなく、私たちのために「場所を備え」、やがて迎えに来られるイエシュアを覚え、その日を信じて待ち望むことを覚えるためにこの「互いに愛し合いなさい。」という戒めを新たに与えられたのだと考えられます。この「愛する」という意味のヘブル語アーハヴ(אהב)は、神を指し示す文字アーレフ(א)と、「窓」を象り「見る」ことを意味する文字ヘー(ה)、そして家を象り「家、家族、国」を指し示す文字ベート(ב)が組み合わさった言葉であり、「神が見る家、国」という意味があります。ですから「互いに愛し合う」とは、ともに集まり、イエシュアが場所を備えておられるという御父の家「神が見る家、国」を覚え、目を留め、そこに迎え入れられる日を待ち望むことであると考えられます。ですから、ヘブル語の

視点で見ると、神のご計画である御国を思わない愛は、神のことを思う愛ではなく、自分という人を中心とした、人のことを思う愛であり、それは神が、聖書が述べている愛の本来の意味から、大きく的外したものであると言わざるをえません。私たちは神に目を留められる、受け入れられる、的を得た愛、「互いに愛し合う」ことを求めなければならないのです。

3. いのちを捨てる

3:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

イエシュアが「いのちをお捨てになられた」とはすなわちご自分を無にして死にまで従われた、イエシュアの人としての生涯と十字架の死を指しますが、その目的は私たちに愛を理解させるためであったと述べられています。つまり「いのちを捨てる」とは、愛を伝え、教え、理解させることであり、そしてその愛とは神の家、御国のご計画を指し示すことであり、そのために自分を無にして、すなわち人のことを思わないで神のことを思い、自分の思いや願いではなく、神の思いと願いに対して、死に至るまで、生涯をかけて信じ続ける、従い続けることがここで勧められていると考えられます。

3:17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。

神のことを思わず、人のことだけ、しかも自分という人のことだけを思う、私利私欲のためだけに生きる自己中心的な者、このような者は「神の愛」すなわち神の国のご計画から遠く離れた者であると述べられています。これはまさに先ほど述べたカインのような者、悪者、人殺しであると言えます。

3:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。

私たちが真実をもって行う愛とは何でしょうか。それは述べたように、まず神のことを思うということだと考えられます。神の御心、み旨を思い、そのご計画を思う、それが唯一と言っても過言ではないくらい重要な第一のことです。しかしそのように言うならば、では人のことはどうでもいいのか、考えなくてもいいのかと問われるかもしれません。しかし考えてみてください。私たちは敢えて人のことを思おうとしなくても絶えず人のことばかりを考えてはいませんか。多くの人に囲まれた社会の中で生き、人の必要に応え、責任を果たし、いつも人のために動いている。そして気づけば自分という人の心配ばかりしている。それが私たち人です。人はいつも人のことばかりを思って生きているのです。「神の愛」とは神を思うことです。神が何を思い、何を考え、どのようなご計画をお持ちなのかを考えることです。人のことは誰より神が考えておられます。

【新改訳改訂第3版】

I ペテロ 5:7 あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

神は私たち人をお造りになった私たちの親なのです。人の親でさえ自分の子を心配するのに神がそれをしないはずがありません。神が心配してくださるというのに、どうして人である私たちが心配する必要があるのでしょうか。神が心配するだけでは足りないとも言えるのでしょうか。つまり人のことを思うことは同時に人のことを心配して下さる神に対する不信と言えます。神が信頼できないので委ねられず、そして人は自分の思うようにやりたいのです。つまり神への不従順です。このように人のことを思うことがいかに悪であるかがお解りいただけるのでしょうか。またイエシュアはヨハネの福音書 21:22 で、人のことを気にするペテロに対して「それがあなたに何かかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」と言われました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

21:21 ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」

21:22 イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何かかわりがありますか。あなたは、**わたしに従いなさい。**」

神を思い、聞き従おうとする時、往々にして人の存在がそれを阻もうとします。誰より自分という人がそれに抵抗します。また人の目が気になる、人に対する恐れも大きな障害となります。ですから人のことを思う者は、神のことが思えなくなるので、カインのようになり、サタンと言われるようになってしまうのです。このような「神のことを思わないで、人のことを思う」思いをやめる、否定する、捨てることが「いのちを捨てる」ということだと考えられます。

4. 揺るがないご計画

3:19 それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。

このように、神を愛する者すなわち神のことを思い、そのご計画に目を留める者は、「自分が真理に属するものであることを知り、そして神の御前に心を安らかにされるのです。」神のご計画とは、私たちに永遠のいのちと、神とともに生きる永遠の住まいを与える計画です。これは私たち人のすべての必要を満たすものです。ですから神のご計画を知れば、それが用意されていて、必ず与えられることが理解できれば、私たちの心が「安らかにされる」すべての恐れや不安から解放されるのは当然のことと言えます。

3:20 たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。

しかし私たちは、神について知れば知るほど、自分がいかに悪であるか、神の愛がない、神のことを思わず人のこと、自分のことばかりを思って生きている者であるかということを知らされます。そしてそんな思いに責められ、「それでもクリスチャンか。」というような心の声を聞くことがあると思います。しかし神はそんな私たちの弱さを、愚かさを「何もかもご存じ」です。そして神のご計画は、私たちの弱さや愚かさによって妨げられたり、変更させられたりするようなちっぽけなものではありません。何ものにも揺るがされない偉大な偉大な神が、天と地とその中に生きるすべてのものの上にお立てになった、ま

さに神レベルの巨大なご計画を進めておられるのです。そしてその完成である神の国、御国の、その国民として私たちが、ただ神の主権による一方的な選びによって定められているならば、私たちの今の状況がどうか、何ができるとかできないとか、ここは良いけどあそこが間違っているとか、まったく関係ないのです。神はお選びになった者は必ず用い、そして救い、約束されたことは寸分たがわず必ず果たされるのです。ですからもしあなたが今も自分の弱さや愚かさ、罪深さを責め続けても、そんなものは神のご計画において何の関係もない、何の足しにもならないことをぜひ覚えていただきたいと思います。

5. 何でも与えられる

3:21 愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、

3:22 また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。

この御言葉はイエシュアが弟子たちに語られたヨハネの福音書 15:7 との結びつきが考えられます。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

15:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。 そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

このぶどうの木のたとえは、イエシュアにとどまる者は多くの実を結び、とどまらない者は火に投げ込まれるという、救いと滅びを示したものです。そもそもイエシュアのたとえ話はすべて神の国、御国に関するものです。ですから「求めるものは何でも神からいただくことができます。」とはイエシュアを信じて救われた者が、神の国において受ける特権のことであり、またその時にはもはや私たちを責めるものは何もなく、「大胆に神の御前に出ることができ」という、後の日の約束が述べられているのだと考えられます。

6. 来てください

3:23 神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。

「互いに愛し合うこと」とは、単に赦し合い、仲良く平和でいるということではなく、私たちのために場所を備えるために父の家に帰られたイエシュアが、やがて私たちを迎えに来られることを覚え、信じて待ち望むことであると述べました。筆者ヨハネはこれを「神の命令」と呼んでいます。そうです、これはもはやイエシュアを信じる者にとって命令なのです。私たちは常に、絶えず、イエシュアが迎えに来られる日を待ち望まなければならないのです。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの黙示録

22:17 御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

22:18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。

22:19 また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。

22:20 これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

22:21 主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。

これはヨハネが記した、聖書の最後の御言葉です。「『わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。」これが私たちの思い、願い、祈りとならなければなりません。初代教会の人々はこれをあいさつの言葉として用い、いつも告白し合い、常にイエシュアを待ち望みながら生きていたそうです。私たちの思い、祈りもまたこうでありたいと願わされます。

3:24 神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです。

「御霊によって知る」とは、先の黙示録 22:17 にあった「御霊も花嫁も言う『来てください。』』ということだと言えます。このように、御霊とは私たちにイエシュアを待ち望ませ、「来てください。」と言わせる、求めさせる、祈らせる存在なのです。どうかキリストの「花嫁」、メシアなるイエシュアの「花嫁」として、私たちの思い、願い、そして祈りが、御霊によってますます「主イエシュアよ、来てください。」という願い求めによって埋め尽くされるように、変えられていくようにと祈り求めます。

主イエシュアよ、来てください。(בְּאֵה-נָא הָאֲדֹנָי יֵשׁוּעַ)